

実録：100年前の姫塚発掘（1）

姫塚（西都原 202 号墳）は、6 世紀後半から 7 世紀前半の墓である（参考：聖徳太子が摂政になったのが 593 年）。西都原考古博物館では、2008～2012 年（平成 20～24）に姫塚を発掘し、2012 年に復元整備工事をおこなった。

これをさかのぼること 100 年前、1912 年（大正元）12 月 25～27 日の 3 日間においても、姫塚の発掘がおこなわれている。それは、宮崎県知事 有吉忠一の主導のもと、東京や京都ほかより多くの学者が動員されて実施されたものであり、考古学史上において最初の本格的な古墳の学術調査としても知られている。

100 年前の姫塚発掘は、当時、宮崎を代表する文筆家として活躍していた若山甲蔵により『土中の日向』という見聞録として日州新聞紙上に掲載された。『土中の日向』には、調査現場における、博士自ら泥まみれになって発掘する様子や冗談を交えた会話等が、実に小気味良いテンポで臨場感たっぷりに描かれており、単に読み物として面白いだけにとどまらず、日本初の本格的な古墳の学術調査の様子について、より深い理解に導く記録ともなっている。

そこで、『土中の日向』について、2 回に分けて紹介したいと思う。

その際、『土中の日向』に登場する多くの人物とその関係を知ることで、よりいっそう発掘時の様子が伝わりと考え、各人物の立場や年齢等について [] 内に補っている。また、引用にあたっては、原文の仮名遣い及び漢字の一部を仮名に改めた。一方、表現のうえで今日的には適切でないと思われる箇所もあったが、当時の雰囲気や原文を尊重し原文表記のままとした。

「…前略… 知事も斎藤・市川事務官もそこにおられ、坂元重俊・松葉秀太郎二君の顔も見た。大阪毎日・大阪朝日の記者をはじめ鹿児島支局・宮崎毎日からも来て、日州は■藤君がいる。主任は今西学士 [東京帝大・37 歳] が一生懸命に探っている、氷のような土を握り揉む、掴む。黒板博士 [東京帝大・38 歳] も両手を泥だらけにしている。三浦敏先生 [前延岡中学校長・58 歳] はヤレソレと気づかいての小言をつづけ、目に見えぬような土器の断片さえ拾わせる。



1912 年 12 月 25 日の姫塚後円部の調査の様子

実際に西都原 202 号墳に立ち、写真の背景にかすかに写る山の端について一致する地点を検討すると、写真は後円部からややくびれ部に向かって下がった位置より北方向に撮影されたとわかる。

奥側に立つ人物左から 4 人目に隠れるあたりに鬼の窟古墳があり、左から 3～4 人目の間には同墳へ通じるマツ並木道が見える。マツの奥にかすむ森は、男狭穂塚・女狭穂塚であろう。

作業員 8 名はみな野良着で脚絆巻きである。奥に立つ山高帽の 3 名と座位の 1 名は学者等と見られ、少なくとも左端は黒板勝美であろう。また、新聞記者かと思われる鳥打帽の 2 名や、警察官であろう官帽の 3 名も見守っている。

左側（西側）より陽が当たっていることや作業員の足元があまり掘り下がっていない点から、正午から午後 2 時頃までとみられる。

（写真は京都大学考古学研究室提供）

人夫は、スコップのような物で、ともすればうんと力を入れて掘りたがるのを、柴田学士〔東京帝大・35歳〕等が傍らから注意して「静かに静かに、そっとそっと」の声がかかる。祝部のような物や高坏のような物や、粘土のような物がたくさん出てくるばかり。夕日は早ほろほろとして、山の端の黒く空の鮮やかに美しくなる頃、カツンと音させる人夫の鍬に、それと一斉に叫んで、今西学士はだんまり的に忍び寄る。

利器は危険だということで、指先は細い篠竹で掘り出すのだから、一通りの苦勞じゃないが、いずれもただもう『土中の世界』を思い『土中の日本』を思い『土中の日向』を思い、また他意あるべく、トド抱き上げたのがホタル『ほとぎの一種?』という酒器のしかもくすり■る見事なものである。歓びの情は人夫先生の顔にまで知られた。

それから勢いを得て、空ややほの暗くなるまでやっていたが、坂口教授〔京都帝大・40歳〕が来る、関君〔帝室博物館・44歳〕が来る、増田先生〔宮内省・50歳〕がござる、濱田学士〔京都帝大・31歳〕が来る、そうしていろいろ話の出るうちに「出た出た」の叫びが起こる。三浦先生はまたやかましく小言をやられる。一堂は笑い出す、出たというのは剣らしい。そうしてよほど長いものらしく、■に周囲を掘っているうちに「やっ」と叫ぶ今西の声。「まままま」例の小言が三浦先生の口から。知らず果たして何の叫びか、暮鴉淋しく鳴いて森に急げば、凍雲■かず天悠々（妻町日向屋にて）

（ここまで25日の調査の様子：『土中の日向（一）』日州新聞大正元年十二月二十七日記事、執筆：若山甲蔵より作成、■は読解不可）

・・・以下、次回に続く

（藤木 聡）